

中国人留学生と日本人学生のペア活動から見てきたもの

The Group Activities between International College Students from China and Japanese College Students

仇 曉芸

Xiaoyun QIU

要旨

本稿は本学の一部の中国人留学生の日本語教育と日本人学生の国際理解という2つの視点から両者のペア活動を行い、その具体的な活動内容、方法、話題、効果、課題などを述べるものである。留学生の日本語力の引き伸ばしをきっかけにスタートしたこの取り組みは、日本人学生にも良い効果をもたらしていることがわかった。学部中国出身の留学生が日頃関心を持っている分野、悩んでいることの詳細等が明らかになり、日本での留学生活の実態がわかった。外国語教育の一貫としての日本語教育のみならず、国際理解教育の視点からグループ活動の意義を認識し、更に良くするための提案もした。

背景と目的

1.1 背景

大学で留学生はよくグループで固まっているという声をしばしば耳にする。その現象の裏には留学生の心理的なことを含め、様々な要因があると考えられる。留学生はよく二つの文化の間に挟まれていると言われている。すなわち、留学の前に獲得していた第1文化である「自文化」と日本に来てからの第2文化の「相手文化」である。井上（2001）は発達主体である留学生がどのような態度で留学生活に臨み、またその態度がどのように変化していくかが留学生活において極めて重要であると指摘している。Berry（1980）が提唱している「文化受容態度」という概念で留学生の発達を見る視点が求められている。さらに、Inoue & Ito（1993）は第1文化が導入された時期によって文化受容を3つのパターンにまとめた（表1）。

留学生は留学した時の年齢や出身家庭によって、3つのパターンのいずれかに分類されうるが、日本にいる外国人留学生は学部・大学院レベルからの留学が多く、本学の留学生の多くも表1の3つ目の

表1 文化受容の3つのパターン

名称	内容と例
(1) 同時的 (simultaneous) 文化受容	自文化化 (enculturation) と文化受容が初めから同時に進行する。出生時から子どもは二つの異なった文化にさらされる。 (例：国際結婚で生まれた子ども等)
(2) 重なり (overlapping) 文化受容	第1文化の文化的アイデンティティの確立前に文化受容が第2文化の影響下で進行する。 (例：海外帰国子女)
(3) 順次的 (successive) 文化受容	第1文化で文化的アイデンティティを確立した後に、文化受容過程が始まる。 (例：学部・大学院の留学生等)

出典) 井上 (2001:13)

「順次的文化受容」の場合が圧倒的に多いと考えられる。留学生がいかに相手文化を取り込むのかを理解し、留学生の文化受容態度に留意したサポート、援助をすることが非常に大事である。

上述した留学生が自分たちだけで固まってしまうという現象の解決に向けて、筆者はこれまで数年にわたって小さい範囲で留学生と日本人学生が共に交流する場を提供してきた。しかし、この問題の改善にはもっと他の何かが必要だと感じた。そこで両方の学生が定期的に会って話しをすることの大切さを感じた。また、日本で留学生として学んでいた筆者自身の経験を振り返ると、同世代の日本人学生とのコミュニケーションの大切さを再認識することができた。

日頃、留学生との話を通じて、多くの留学生は日本人の友達ができにくいことがわかった。このことに困って悩んでいる人は少なくない。留学生に同世代の日本人学生の友達がいたら、もっと気軽に日本語を使い、コミュニケーション力も引き伸ばしやすいに違いないだろう。同世代の日本人の友達がいるメリットは他にもある。例えば、ちょっとしたことで一々教員に聞かなくても身近な日本人友達に聞くことができる。通じることの楽しさを体験できると日本語学習のモチベーションの向上にもつながり、良い循環を生み、さらに、もっと深く日本文化を知ることでもできるだろう。

そこで、2017年4月に筆者は留学生が日本文化を理解し、日本語を話す機会を増やすため、担当する「生活情報プレゼминаール」という授業の受講者である中国人留学生10名に一人ずつ日本人学生のパートナーをつけ、中国人留学生と日本人学生が共に活動する「Happy C&J」(Happy China and Japan)というグループを作った。本稿はその活動内容を報告するものである。報告を通して、見えてきたものを述べ、更に必要な内容を検討し、今後の課題にもつなげていきたい。

1.2 本稿の目的

(1) 本調査報告には主に二つの目的がある。

「Happy C&J」活動を通して、どのような実態が見えてくるのかを探り、中国人留学生と日本人学生にとってそれぞれどのようなメリットがあるのかを検討する。

(2) 学生のみならず、教職員にとってもさらに留学生と留学生を取り巻く環境について理解を深める一つのきっかけとして、現在の良いところを続けながら、改善点と問題点も見つけ、今後より良い活動ができるようにするためにどのようにしたらいいのかを検討する。

2. 「Happy C&J」活動の詳細について

2.1 「Happy C&J」のメンバー

「Happy C&J」は10名の中国人留学生とそのパートナーとなっている10名の日本人学生、合計20名の学生によって構成されている。10名の中国人留学生はすべて生活情報学科の3年編入生であり、本学の別科を経て学部編入してきた学生である。一方で10名の日本人学生は日頃、筆者の知り合いの学生とその友達である。できるだけ外国の文化に興味があり、人とコミュニケーションをすることが好きな学生を優先的に選ぶようにした。本学の「人間福祉」、「人間発達心理」、「生活情報」、「幼児教育」の4学科の1年生～4年生までの全学年の学生がいた。また、メンバーのまとめ役として、コミュニケーション力の高い日本人学生を団長に選んだ。

2.2 留学生の中国での出身地と日本語力

表2 留学生の中国での出身地と割合

出身地	人数
山東省	3
湖北省	3
湖南省	1
河南省	1
広東省	1
甘肅省	1
	計：10

中国の急速な経済発展に伴い、留学生の出身もだいぶ変わってきた。筆者が学生の頃2010年ぐらいまでは、北京や上海などの都会出身の留学生も多かった。しかし、ここ10年、大都会出身の留学生がめっきり減った。地方出身の留学生が大幅増加していることがわかった。表2を見ると、10名の留学生の出身地は中国の華中、華南地域が多く、北は山東省、西は甘肅省まで中国の様々な地域からやってきた留学生である。山東省と湖北省からそれぞれ3名で、他の省からはすべて1名だった。留学生と関わる方々も留学生出身地の変化への気付きをはじめ、広い中国の様々な地域による多様な文化に関心を持つことが大事だと考えている。

3年次編入時点で、中国人留学生たちは既に1年～1年半ぐらい日本に滞在し、本学の別科で日本語を強化した。来日する前に中国の高等教育機関で2年ぐらい基礎的な日本語を習った者が多かった。中には半年ぐらい日本語を習って、日本に来た留学生もいた。中国の短大、「技校」と呼ばれている日本の専門学校のような教育機関出身の学生もいた。

以下の表3は2017年4月の時点の留学生の日本語能力を示している。10人中、9人が日本語能力検定(JLPT)を受験し、1人はJ.TESTを受けて、C級に合格している。日本語能力検定(JLPT)とJ.TESTの点数の関係性について、J.TESTの公式サイトに基づき、表4にまとめた。C級は600点以上とされており、だいたい日本語能力検定(JLPT)のN2のレベルと考えられる。つまり、10人中3/5を占める6人はN2を持っており、残りの4人はN1レベルである。留学生の日本語力に関する試験への大

まかな知識は、大学の教職員にとってもはや一種の教養となっている。

表3 中国人留学生の日本語力

日本語能力検定 (JLPT) N1	4人
同 N2	5人
J.TEST C級	1人
合計:	10人

表4 日本語能力検定 (JLPT) と J.TEST の関係性

日本語能力検定 (JLPT)	J. TEST の点数
N1	650~700
N2	550~600
N3	400~450
N4	350~
N5	250~

J.TEST のオフィシャルサイト: <http://j-test.jp>
(最終閲覧日: 2019年9月10日)

J.TESTでは様々な改善や改革を経て、2019年5月から次の三段階にレベルを分けている (表5)。A-Cレベル試験は日本語能力検定N2以上の試験、D-Eレベル試験はN4、N3に相当する。

表5 J.TESTの3つのレベル

上級レベル試験	(A-C)
初級・中級レベル試験	(D-E)
入門レベル試験	(F-G)

さらに、「CEFR」(Common European Framework of Reference for Languages) というヨーロッパ言語共通参照枠という語学能力の基準がある。「CEFR」は読む、書く、聞く、話すという4技能について、語学能力を6段階 (A1、A2、B1、B2、C1、C2) で評価する国際的な基準である。今は欧州をはじめ、世界の各国でも利用されている。

J.TESTは会話試験、長文を書く試験がないため、「CEFR」と完全に一致するわけではない。JLPT (日本語能力検定)、J.TESTとCEFR三者のレベルの目安について表6の通りである。

表6 JLPT、J.TESTとCEFRの三者のレベルの目安

CEFR	JLPT	J.TEST の試験、点数と認定級	
		A-C 930点	特A級
CEFR C2		A-C 900点	A級
		A-C 850点	準A級
		A-C 800点	B級
CEFR C1	N1相当	A-C 700点	準B級
CEFR B2	N2相当	A-C 600点	C級
CEFR B1	N3相当	D-E 500点	D級
CEFR A2	N4相当	D-E 350点	E級
CEFR A1	N5相当	F-G 250点	F級
		F-G 180点	G級

2.3 活動の導入

留学生には「Happy C&J」の存在を紹介し、なぜそれに取り組むのかという理由も伝えた。留学生の参加意思を確認し、多くの留学生がこの取り組みに積極的な意欲を見せた。また、日本人学生とも話しをし、参加の意思を確認した。日頃、授業などを通して日本の学生と色々な話をして、わかったこともある。大学に中国の留学生がいることを知っていても、なかなかきっかけがないと日本人学生も留学生の友達が作りにくいようである。

留学生と日本人学生の出会い方について、10人の日本人学生に「生活情報プレゼминаール」の授業の後に教室に来てもらった。そこで、留学生と日本人学生を紹介し、1対1のペアを作り、話しをしてもらった。2回ぐらい共に食事をするなどの経験を経てから活動が始まった。

2.4 活動の頻度と場所

上記、中国人留学生と日本人学生の1対1のペアが結成してからは、月2回の頻度で学内で活動をしていた。活動時間は毎回1時間で、平日互いの都合の良い時間帯に会うようにしている。毎月合計2時間となっている。場所は学内のカフェテリア、フジショップ、教室、食堂など学生たちが会いやすい場所を自由に決めてもらっている。なお、毎月の日時と場所は、日本人学生から筆者に報告することになっている。

3. 具体的な話題と学生の変化

2017年度の前期・後期の「Happy C&J」の活動を通して、学生たちが具体的にどのような話しをし、活動に参加する前と参加した後で自分自身の考えなどにどのような変化があったのか、さらに今後どのようにしたいかなどの情報を把握するため、2018年1月上旬にアンケートを実施した。以下、アンケートの結果について報告する。

3.1 話題

問1：ペアの方と一緒に話す時、どんな話題について話しをしたか。話題に○をつけてください。挙げていない話題があったら、下線部に書きなさい。

食べ物・言語・マナー・服装・旅行・観光地・乗り物など（交通関係）・祝日・スポーツ・環境・生物・建築・住宅・お勉強・将来の夢・家庭・仕事・恋人・ボランティア

この質問への答えを集計した結果を表7に示している。「食べ物」、「言葉」、「観光地」、「仕事」の4項目に○をつけた学生が特に多かった。学生たちが相手の言葉や日頃どんな食事をしているのかについて関心を持っていることがわかった。また、旅行や遊び、将来の仕事、勉学について話したことのある学生も多かった。今の大学生活と自分の将来に関する話題が多いという傾向が見られた。

一方で、自由記述となっているアンケートに提示していないトピックとしては、「アニメ」や「声優」など日本のポップカルチャーに興味を持っている学生が少なくなかった。留学生には、日本のアニメに

憧れて日本に留学したいと思った人が多い。その他、「ディズニーランド」、「ニキビ」、「化粧品」などの話題も挙げており、大学生たちは年相応に遊び、おしゃれ、美意識について関心を示していることが明らかになった。さらに、「電子マネー」について会話を交わしたグループも複数あった。その背景にはおそらくここ数年、中国では猛スピードでスマートフォンでの決済が普及していることと関係していると思われる。中国では「微信」(wechat)と「支付宝」(Alipay)という今の中国の二大支払いアプリが主に使われている。今、日本ではLINE Pay、PayPayなどの電子決済も普及しているので、日本の学生もだいたい話についていけるようになった。

表7 留学生と日本人学生が話したことの話題

アンケートに挙げられているトピック：	食べ物、言葉、マナー、服装、旅行、観光地、祝日、スポーツ、環境、生物、お勉強、夢、家庭、仕事、恋人、ボランティア
アンケートに挙げられていないトピック：	アニメ、声優、オタク、バイト、休暇の過ごし方、ディズニーランド、ニキビ、電子マネー、参加した祭り、化粧品

3.2 活動に参加する前と参加した後の変化

問2：Before & Afterのことだが、Happy C&J活動に参加する前と参加した後のあなた自身の変化について、どのように思うか。変わったところがあったか。もしあったら、具体的にどのような変化があるのかを教えてください。

まず、中国人留学生の答えを見ると、10人中8人が変化はあると答えており、全体の4/5を占めている。以下のような感想が寄せられている。

- ・日本人の学生と話しをしやすくなった。怖くなくなった。
- ・日本人の友達ができるようになった。
- ・時々学内ですれ違う時も気軽に挨拶ができるようになった。
- ・いつ何を話すべきかという要領のようなものがわかるようになった。
- ・前より仲がよくなっている。
- ・日本語力がアップし、話す時、前より勇気を持つようになった。
- ・日本人の友達の影響で歌舞伎に興味を持つようになり、今度一緒に見に行くつもりだ。
- ・日本の若者の考えを知ることができ、日本文化を更に理解し、同世代の日本人が中国のことをどのように思っているのかを知ることができた。

上記のように、この活動に参加する前より対人関係に積極的になっている学生が多かった。一方で、2名の学生はあまり変化がないと書いてあった。直接口頭で聞いた結果、この二人はそもそもあまり人と話すのが好きではなく、ましてよく知らない相性もあまり合わない相手と一緒にいるとあまり楽しくないようである。改めてこのような活動の場合、人の性格、相性も一つのテーマであると感じている。

一方で、日本人学生はどうだろう。10名の日本人学生はすべて、この活動がよかった、プラス効果があると思っている。自身の変化について以下のような感想があった。

- ・留学生の友達が増えた。
- ・中国の文化に目が行くようになって、視野が広がった。

- ・外国文化全般に興味を持つようになり、中国への理解が深まった。
- ・中国の「一人っ子政策」が特に印象に残り、自分にとって遠い存在だった中国をととても身近に感じるようになった。お金を貯めて中国旅行をしたい。
- ・ゆっくりとリラックスして会話ができたので、日本の良さと中国人からの目線を知ることができた。
- ・怖かった中国人への印象が消え、優しくて面白い人や楽しい人がいっぱいいることがわかった。
- ・留学生の家庭のことを知り、また中国の学校に関する知識も増え、留学で得た良い経験と留学による不安も知った。改めて日本について興味を持つようになった。
- ・新たな人と交流する機会になり、中国語で話しをしたいと思うようになった。同じくらいの年齢の仲間の積極的なところに励まされ、自分もチャレンジしたいと思うようになった。
- ・中国のことをいっぱい知ることができた。道に迷っている中国人観光客を助けられるようになった。
- ・初対面の人とどうやって話せば相手と盛り上がった話しができるかを考えられるようになった。

日本人学生は大変良い刺激をもらっていることがわかった。これまで知らなかった中国のことを身近に感じ、中国語と中国文化にも興味を示し、中に実際中国に行き、旅行をしたいと思うようになった学生もいる。また、自国である日本への再認識にもつながっている。日本の良さを知り、母国日本の文化をもっとしっかりと勉強すべきだと考えている学生もいる。

3.3 他の感想

問3：他にお気づきの点や改善点などがあれば、気軽に教えてください。

この問いに対して、日本人学生からの記述は少なかった。前期と後期、グループのパートナーをちょっと変える試みをしたため、一人の学生は「パートナーを変えないほうがいい。せっかく仲良くなったので」という感想を書いていた。もう一人は「いつか皆で中華料理を食べに行きたい」と書いていた。

一方で、中国人留学生の場合、半分の学生が感想を書いていた。

- ・月2回のペースを月に1回にしてもいいかもしれません。
- ・食べ物や勉強の話し以外はあまり話題がなくて、相手は年下だし。
- ・話す口調やマナー、更に気をつけたほうがいい。
- ・自分は生活費を稼ぐのが精一杯で、毎日アルバイトがある。せっかく先生が日本人友達を紹介してくれてもなかなか一緒に遊ぶお金と時間がない。

特に最後の記述のように留学生のリアルな留学生活が浮き彫りになっている。生活を支える大事な根幹となるアルバイトが非常に大切である留学生が少なくなかったため、時間と経済的な余裕がないことに苦しんでいたようである。出身家庭の経済的な事情と留学生本人の日本文化受容態度が留学生活にとっていかに大事であるのかも明らかになった。

また、留学生には、30歳前後の人もある。青年期の年の差は比較的大きなギャップをもたらす場合があるので、10代後半、20代前半の日本人学生に年上の留学生が先に気を使うことになりやすいこともわかった。

留学生理解の問題は多岐にわたり、周りの教職員をはじめ、留学生本人たちにとっても留学生活への理解も容易ではない場面がある。今後も増加し続けられる留学生を受け入れる側にとって、多くのことを考えさせられている。このような日本人学生と共に何かをする機会のある授業を作ったり、留学生を受け持っている教職員同士がコミュニケーションをしたり、意見交換を行ったりするのは有意義な取り組みであろう。

4. まとめと今後の課題

アンケートに対する学生たちの答えから様々なことが分かり、「Happy C&J」活動に「参加してよかった」という声が全体の8割を占めた。この活動を通して、中国人留学生と日本人学生双方が多くのものであることができたと言えるだろう。留学生の日本語力の引き伸ばしとグループの固まりを解消するためにスタートしたこの取り組みは、留学生の日本語学習のコミュニケーションのツールになったのみならず、日本人学生にとって「中国文化理解」、「国際文化理解」という視点でそれなりの収穫を得ることができた。異国の同世代の人たちの考えを知ることができたのも良い刺激になり、互いにとってウインウイン関係である。一部の日本人学生は前より中国の文化と言葉を知ることができて、もっと知りたいという好奇心が生まれたこともよかった。昔怖かった中国人へのイメージも良くなり、中国にも優しく楽しい人がいることを知った日本人学生がいることは、中国出身の筆者にとって嬉しいことである。一方で、留学生にとっても良い機会だったようである。日本語を話す機会が増え、少しずつ自信を持てるようになった。人とのコミュニケーションがあまり得意ではない留学生も以前より勇気を持って日本人学生と交流できたことも一つ大きな成果だと思っている。少しでいいので、一步を確実に踏み出すことに大きな意味がある。

一方で、留学生を取り巻く環境は依然として厳しい面があり、時間的な余裕と経済的な余裕がない留学生も少なくないのは事実である。この問題にどう対応するかは今後考えていく必要がある。また、学生同士の相性もあり、これからグループを作る時、どのようにしたらいいのかを考える必要がある。いったんペアになったグループをあまり安易に変えないほうがいいこともわかった。この活動が続けるには教員自身の時間の確保が肝心であることを改めて感じている。また、他の形で日本人学生と留学生が共に何かをするきっかけを作る必要性も検討したほうがいいかもしれない。本稿は量的なデータが少ない。また、取り組みを実施する前のアンケートなどの調査もなかったもので、これらのことを今後の課題としたい。

参考文献

- 井上孝代 (2001) 『留学生の異文化間心理学』 (玉川大学出版部)
- Berry, J.W. (1980) Acculturation as varieties of adaptation. In A. Padilla (Ed.) *Acculturation: Theory, models and some new findings* pp.9-25
- Inoue, T & Ito, T. (1993) Acculturation problems of foreigners in Japan. *Japan Health Psychology*, 2, pp.64-74